『ラパチーニの娘』について

上　野　征　支

A Study on *Rappaccing's Daughter*

Masashi UENO

要　旨

ホーソーンの短編小説『ラパチーニの娘』のプロットと背景を吟味し，作者の意図を考察する

Synopsis

This essay analyzes the plot and the background of the short story, *Rappaccini's Daughter,* witten by Nathaniel Hawthorne, and also elucidates the intention of the author.

I

ホーソーンは、そのほとんどの作品において，罪とその結果を中心テーマとして取り扱っているが，ホーソーンのいう罪は，人間の原罪とか，人間の本性，限界，二重性，人間の精神に対する愛と尊敬の欠如，孤高，協調精神の欠落，高慢，冷酷，不寛容な態度など，犯罪そのものというよりは，むしろもっと精神的，道徳的な欠陥に係わったものである。聖書や歴史小説，ゴシック・ロマンスなどを愛読した[1]ホーソーンは，多分にそれらの要素を取り入れ，神秘的，幻想的な雰囲気をかもし出しながら，人間の精神，内面的な問題を外面的な事象によって比喩的，象徴的に描いていることが多い。

ホーソーンは，自己のこの性癖を十分自覚し，当時の文壇における自己の立場とも絡めて，短編小説『ラパチーニの娘』(*Rappaccini's Daughter*)の冒頭で，次のように自己紹介をしている。

「作家としての彼は，超絶主義者（この派の人たちは，呼ばれかたこそちがえ，世界のあらゆる国の現代文学で活躍しているのだが）と，大衆の理解と共鳴を求めて作品を書いている大多数の作家たちとの，中間に位置するという不幸な地位を占めているように思われる。後者の一団の趣味に合うには，彼の作風は洗練に欠けているとまでは言えないにしても，あまりにも現実ばなれのした実質のないものであり，それでいて，前者の精神的な，あるいは形而上学的な，要求を満足させるには大衆性をもちすぎているので，必然的に彼の読者は散在している個人か，せいぜい孤立した一群の人たちに限られているのである。公平に見れば，彼の書くものには空想や独創性が全く欠けているわけではない。もし寓話に対する根深い好みが無かったならば，彼の作品はもっと評判になったであろうが，その寓話癖のために，彼の物語のプロットや登場人物は雲の上の出来事か雲の上の人間のような様相をおび，その構想から人間的な暖かみが抜け出してしまう傾向がある。彼の小説には，歴史ものもあれば，現代ものもあり，ときには，私の知っている限りでは，時間や空間に全然関係のない小説も書いているようである。いずれの場合にも，彼は時代の外面的な風習をほんの飾りものの刺繍程度にとどめ――現実に起きたことらしい見せかけは最小限にとどめて――主題のもつあまり明白とは言えない特殊性だけで，興味をそそろうと努力している。ときには，彼の奇怪な幻想の世界の中にも，自然の息吹きや，哀感と情愛の雨滴，ユーモアのきらめきさえも入り込むことがあり，結局，我々もまだこの地上の世

＊　助教授　一般教科英語

界の限界内にいるのか，というようなおもいを読者に感じさせもする。最後に，これらの作品に適合した観点に立って読めば，他のもっと有能な作家のものに劣らず，オーベピン氏[2]の作品も暇な時間を楽しませてはくれるであろうが，そうでない場合は，恐らくとても無意味なものに見えるにちがいないことも付け加えて，このすこぶる粗雑な短評を終わることにする。」[3]

ここには，ホーソーンの自作の幾分寓話にすぎる傾向と，作家としての自信と限界なるものが表明されているように思われる。

次に，ゴシック・ロマンス風の寓話で，人間改造という知的傲慢の罪を犯し，その結果わが娘の生命を犠牲にする医学者を扱った短編「ラパチーニの娘」を取り上げ，プロットの展開を中心に，作者の意図と作品の背景を考えてみたい。

II

先ず，この物語の荒筋を詳しく追ってみたい。物語は，イタリア南部出身の貧しい医学生，ジョヴァンニ・ガスコンチ (Giovanni Guasconti) がパデュア大学で研究を続けるため，市内の古い屋敷の二階に下宿をするところから始まる。これといった調度品もない，殺風景な部屋にひきかえ，窓の下の陽光に照らし出された手入れのゆきとどいた庭園に青年は目を奪われる。それは隣家のジャコモ・ラパチーニ (Giacomo Rappaccini) という高名な医学者が手塩にかけて造った立派な庭園であった。庭の中央には，めったに見られぬような芸術的な彫刻を施した大理石の噴水の廃墟があり，その噴水の水が落ち込んでいる池のまわり一面には，様々な植物が植えてあった。特に，池の真中の大理石の壺にある灌木などは，おびただしい数の紫の花を付けていて，その花の一つ一つが宝石のような光沢と濃艶さを帯びていた。その中を白髪混りの中年過ぎの学者然とした男が見回っていたが，それがラパチーニ博士であった。不思議なことに，博士が植物の手入れをするときには分厚い手袋やマスクを用い，直接触ったり，匂いを吸い込んだりすることを避けていた。やがて，それ以上の手入れは自分には無理だとばかり，娘を呼んで植物の世話を任せる。ビアトリス (Beatrice) という名のその娘は，喜んで引き受け次の言葉をかけながら植物の手入れにとりかかる。

「さあ，私の妹，私のすばらしいものよ，これからあなたの世話をしてあげるのはビアトリスの仕事になるのだよ。だから，あなたの方でもあなたの接吻と，私にとっては生命の息吹きになってくれるその香り高い息吹きで，私に報いておくれね。」[4]

ジョヴァンニは，この未知の美しい女性の姿と声に接して，また別の花が人間の姿をした姉妹となって現われたかのような特異な印象を受ける。そしてその夜，濃艶な花と美しい娘の一体混然となった夢を見るのであるが，いずれにしても不思議な危険性をはらんだものであったと作者は述べて，何事か予言めいた暗示を与えているのである。

翌日，ジョヴァンニは紹介状をもらってきていた大学の医学部教授であり高名な医者であるピエトロ・バグリオーニ (Pietro Baglioni) を訪問する。教授はもうかなりの年輩で，陽気で親切そうな人柄の持ち主であり，ジョヴァンニを晩餐まで引きとめる。そこでジョヴァンニはラパチーニ博士のことをきいてみると，意外にも厳しい批判を聞かされる。

「あの男は人類よりも科学そのものの方に，揺かに大きな関心を払っていると言われている……あの男にとっては，患者はなにかの新たな実験の材料としてのみ興味があるのだ。あの男は既にあれだけ積みあげている豊富な学識の上に，けし粒一つほどの知識でも付け加えるためには，人間の生命も，自分自身の生命も，自分の何よりも愛しているものも含めて，犠牲に供してもいとわない人間なのだ。」[5]

更に教授は，ラパチーニは有毒植物と称されているものから薬効のある一切の医療品が調剤できるという説を立て，自分の手で毒草を栽培しているだけでなく，新種の有毒植物を造り出したとさえいわれていると言い、また，娘のビアトリスについても，評判通りの若さと美しさを認めながらも，決して良くは言わない。

ほろ酔い気分のジョヴァンニは，ラパチーニ博士やビアトリスについての奇怪な幻想に頭を満たされながら，半信半疑のまま宿に帰る。ところが実際，窓から眺めたビアトリスの美しさはこれまでの想像よりも揺に勝れ，彼女の表情の素朴さと優しさに彼は心を打たれる。またその一方で，この美しい娘と噴水上の宝石のような花を垂らしているあの華麗な植物との間に，どこか似通ったところがあるような感じに襲われもする。

そうするうちに，ビアトリスはまたしても灌木に次のように話しかけ，その濃艶な花を一輪摘み取り，自分の胸につけようとする。

「妹よ，あなたの息吹きを吸わせておくれ。私はありふれた空気では気が遠くなるのだから。それから，あなたのこの花も一輪おくれ。そっと茎からはなして私の心臓のそばに飾るつもりなのだから。」[6]

ところがそのとき不思議な出来事が起きる。たまたま彼女の足もとの小径を這っていたトカゲかカメレオンのような小動物の頭の上に，花の折れた茎からこぼれ落ちた樹液がかかり，その生物は動かなくなってしまう。更に塀の向こうから舞い込んできた一匹の蝶が，彼女の頭上で息に触れて死んでしまう。死骸の上にかがみ込んで祈っていたビアトリスが，窓辺の青年にふと気付き，ここで初めて二人は挨拶を交わす。ジョヴァンニは帰りがけに買っておいた花束を窓から投げ下して彼女に贈る。ところが，遠目で定かではないが花束が彼女の手の中でしぼみかかっていたようにジョヴァンニには思えてならないのであった。彼女はビアトリスと言葉を交わしたことによって一層得体の知れない力にとらわれていく。彼は深い心の持ち主ではなく，空想にはしりやすい頭と熱狂的なほどの情熱的な南欧人気質を備えていたので，ビアトリスの濃艶な美しさに心狂わせながらも，彼女の肉体にしみわたっているように思える毒素が彼女の精神をも冒しているにちがいないと想像し，愛と恐怖との入り混った複雑な心境に揺れ動くのである。作者は，ビアトリスが既にジョヴァンニの体内に強烈で微妙な毒素を注ぎ込んでいたとして，その様を次のように述べている。

「それは，彼女の濃艶な美しさは，彼の心を狂わせるほどのものであったにしても，愛とはいえなかった。と同時にまた，彼女の肉体にしみ渡っているように思える毒素は彼女の精神をも冒しているにちがいないと，彼は想像してはいたけれども，恐怖ではなかった。愛と恐怖との気まぐれな混血児なのであって，体内に両方の親を合わせもち，一方のように情熱に燃えるかと思うと，また一方のように恐怖に震えもした。ジョヴァンニには，何を恐れるべきなのかが判らなかったし，何に希望をかけていいのかは，更に一層判らなかった。それでいて，希望と恐怖とが絶えず彼の胸の中でせめぎ合い，交互に相手を征服すること思うと，また新たに闘いの火の手をあげたりした。たとえそれが陰険なものであろうと，明朗なものであろうと，単純な感情こそは恵まれている！地獄の領域を照らす炎をつくり出すものは，二つの感情の凄惨な混合体なのである。」[7]

心の狂熱を静めようと足早やに街を散歩していたジョヴァンニは，バグリオーニ教授に呼び止められ，自分がラパチーニの研究の対象となって何らかの実験の材料にされていると警告される。

「お前は博士の手中に落ち込んでしまったのだ。ビアトリスはこの謎にどんな役割を荷っているか」[8]と言われたジョヴァンニは，たまらず逃げ帰る。下宿にたどり着くと，リザベッタ婆さんが愛想よく迎え，隣の庭へ通じる道があると教えてくれる。ジョヴァンニは，婆さんがこんなお節介やきをするのも，あるいは，教授が言っていたようにラパチーニの陰謀ではないかと疑いもするが，ビアトリスに近づける可能性があると考えて，隣りの庭園に入っていく。

やがて，ビアトリスが小径を軽快な足取りでやってきて，こわれた噴水の近くで彼と出合った。彼女の顔には驚きの色が浮かんではいたが，素朴な親しみのある喜びの表情に輝いていた。彼女は陽気になり，ジョヴァンニとの会話から純粋な楽しさみを味わっているように見えた。彼女の様子には，離れた小島の娘が文明世界からの旅行者との話を楽しんでいるかのようなところがあり，どうやら彼女の人生経験はこの庭園の内側だけに限られていたらしく，その質問内容も，引きこもった生活のために世間の習慣や生活様式についての知識にまるで欠けていることを示していた。ジョヴァンニは，あれほど自分が想像をかき立てられた女性，あれほど恐怖の色合いをもって頭に描き，現にこの目でその恐ろしい属性の現われを見た女性と，こうして肩を並べて歩き，彼女と兄妹のように話を交わし，彼女がこんなにも人間的で娘らしい女性だと知ったことを思うと驚異の念に打たれた。ところが，散歩の途中でジョヴァンニが噴水の近くにある例の美しい花が一輪ほしくなり，灌木に近よった途端，ビアトリスが短剣で心臓を突き刺されでもしたかのような悲鳴をあげ，「それにさわってはいけません！生命にかかわります！」といって彼を引き止め，自分の家に逃げ帰ってしまう。自分の部屋に戻ったジョヴァンニは，彼女につかまれた手の痛みも忘れて，彼女の想いにふける。「彼女も人間だった。彼女の人柄には，一切の優しい女性的な性質も備わっている。最も崇拝に値する女性だし，自分の側からも最高の英雄的な愛を拝げられる女性だとジョヴァンニは思い，これまで彼女の肉体と道徳観に潜んでいる恐ろしい特異性の証拠だと思えていたことも，今は忘れ去られるか、恋情の微妙な詭弁によって，魅

惑の黄金の冠に移し変えられ，特異な女性であるだけに，それだけなお一層素晴らしい女性に思えたのであった。」[9]

さて，時が流れ，二人の逢瀬も度を重ね親密の度を加えていくが，ビアトリスの態度にはある控え目さがあって，「愛が要求し神聖化する，口づけや，握手や，ほんのちょっとした抱擁ですらも，二人の間には一度も起きなかった。彼は一度として彼女の艶やかな巻毛に手を触れたことがなかった。……二人の間には際だった障壁がおかれていた。ジョヴァンニがときたまその限界を踏み越そうとしたときには，ビアトリスはいかにも悲しそうな，しかつめらしい様子に変わり，その顔にも，言葉で彼をはねつける必要もないほどの，ぞっとするような荒涼とした離脱の表情を浮かべた。そうすると，彼の愛も朝霧のように薄れて，疑いだけが実体を帯びてきた。しかし，彼女が再び明るさを取り戻すと，たちまち，彼にとって彼女の姿は，疑わしい神秘的な存在から美しい純真な娘に変わってしまう」[10]のである。

ところがある日，バグリオーニ教授が訪ねて来て，最近読んだという「あるインドの王候からアレキサンダー大帝に賜られた有毒の美女」の話をする。その女は生まれ落ちたときから毒薬で育てられたため，全身に毒薬がしみ込んで，いまでは彼女そのものがこの世にまたとないほどの猛毒と化し，毒薬が彼女の生命の要素となり，彼女の香ぐわしい息は空気を毒し，彼女の愛は毒を注ぎ込み，彼女の抱擁は死であるという程の有毒の女性の話である。次いで教授はラパチーニの話に話題を変え，「君の部屋にたち込めているこの珍しい香りは何だね？……いい匂いだが，よく嗅いでみると快いものではない。長く吸っていると気分が悪くなりそうだ。……ラパチーニは自分の造る薬に香ぐわしい香気を混ぜるそうだが，あの麗わしいビアトリスも，きっと彼女の患者たちに，処女の息のように甘い水薬を飲ませることだろう。だが，それをすすった者こそ災難だぞ！」[11]と暗におどす。

ジョヴァンニは，それは教授の想像にすぎないと反論してはみたものの，彼女の性質について，自分の抱いているのとは反対の見解をそれとなく述べられてみると，たちまち無数の漠然とした疑惑がはっきりとした形をおびてきて，不安がつのる。教授は，「しかし，まだ救い出すのに手おくれではない。多分，あの不幸な娘だって，父親の狂気によって切り離されてはいても，もう一度通常の性質の限界内につれもどすことができるかもしれない」と言って，解毒剤の入った小さな水薬瓶を置いて帰る。

ジョヴァンニは，これまで，ビアトリスと交際を続けていた間も，ときおり彼女の性格についての暗い推測に襲われることがあった。それにしても，彼女から受けていた素朴で，自然で，情愛深い，罪のない女性だという印象は，彼の脳裡に深く焼きつけられていたので，いまバグリオーニ教授に描いてみせられたような姿は，異様な信じられない姿のように思え，彼には自分の最初に抱いていた観念とすら相容れないものであるような気がした。勿論，最初のころにちらりと見せられたこの美しい娘についての醜悪な記憶が残ってはいた。彼女の手につかまれたとき，花束がしぼんだことも，蝶が，彼女の息の香り以外にはこれといった表面上の原因がなにもないのに，陽光に照らされた空気の中でころりと死んだことも，忘れられなかった。けれども，そうした事実も彼女の性格の純な光の中に溶け込んでしまうと，事実としての効力を失い，どんな感覚の証言がそれを立証しているように見えようと，幻覚にすぎなかったのだということになった。ところが今は，彼の精神も最初のころの熱狂的な愛情によって高められていた高さに自分を維持することができなかった。彼は転落し，地上的な疑惑の中をはいずり回り，彼女に対して強い不信を抱いた。彼は自分の納得のいくような何らかの決定的な試験をしてみて，果して彼女の肉体の本質に，それに応じた魂の奇形を伴わずにはおかないはずの，恐ろしい特異性があるかどうかを，はっきりとつきとめようと決心する。あのときのトカゲや蝶や花の場合は，遠くから見おろしていたのだから，自分の目に欺かれたのかもしれない。だが，数歩の距離を隔てただけで，ビアトリスの手に渡るとともに，新鮮ですこやかな花が突然しぼむのを目撃することができれば，もはや疑問の余地はないのだと考えて，彼は急いで花屋へ行き，まだ朝霧で光っている花束を買込む。

ところが，ビアトリスに会う前に，自分の生気あふれる美しい容貌を鏡に写し，「少くとも彼女の毒も，まだ僕の体内にはしみわたっていないのだ。僕は彼女に握られてしぼんでしまうような花ではないのだ」[12]と思いながら，ふと，自分の手に持ったままの花束がうなだれかかっているのを目に留めて，何とも言いようのない恐怖の戦慄をおぼえる。念のために，天井の蜘蛛に息を吹きかけてみ

ると，蜘蛛はたちまち死んでしまう。激しい怒りと絶望にかられたジョヴァンニは，「呪われ者！呪われ者！お前は，お前の息でこういう虫さえも殺せるほどの毒物になってしまったのか」[13]と自分に吐きつける。

そんなジョヴァンニではあったが，いざ彼女の姿を前にすると，彼の怒りも不機嫌な無感覚状態に変わってしまう。二人が庭の中を歩き，例の宝石の如き花をつけた灌木が中央に生えている池や大理石の噴水のところに来たとき，ビアトリスは初めて自分の出生の秘密を打ち明ける。

「父は恐ろしいほど自然の秘密に通暁している人なの。私が初めてこの世の空気を吸ったとき，この植物も地上に芽を出したの。父の科学の，父の知性の産物としてね。私はただの父の現世的な子供なのだけれど。ああ，それに近づいてはだめよ！この植物はあなたの想像もできないような性質をもっているのよ。でも，私はこの植物とともに育ち，花を開き，その呼吸で養われてきたの。これは私の妹なのだし，私は人間の愛情でこれを愛してきたわ。それというのも，悲しいことに！あなたには思いもつかないことでしょうが，恐ろしい宿命を受けていたからなの。」[14]

その恐ろしい宿命とは，ビアトリスの語るところによれば，彼女の父の致命的な科学愛のおかげで，彼女が自分の同類との一切のつき合いを絶たれたことを指し，神様がジョヴァンニをここにおつかわしになるまではどんなに辛いことであったかと述懐する。

ところが，このあたりになって，これまでもやもやとしていたジョヴァンニの怒りが爆発し，彼は毒気を含んだ軽蔑と憤りをこめて呼ぶ。

「呪われ者め！自分の孤独に耐えかねて，おれまでも生の一切の暖かみから切り離し，自分の言いようもない恐怖の世界に誘い込んだりしたのだな！……そうだ，この毒女めが！お前の仕業だぞ！お前はおれまでも破滅させた！お前の毒をおれの血管に注ぎ込んだ。おれまでも，自分と同じいとわしく恐ろしいものに —— この世の奇跡のようなふた目と見られぬ怪物にしおった！……さあ，見るがいい！おれがラパチーニの清純な娘から得たこの力を！」[15]

そう言って，周りに飛び交う虫の群に息を吹きかけて殺してみせる。ビアトリスは悲痛な叫び声をあげて弁明する。

「見たわ！見たわ！あれは父の恐ろしい科学の仕業です！絶対に私のしたことではありません！決して！決して！私はただあなたを愛し，しばらくあなたと一緒にいさせていただいて，お別れした後も，あなたの面影が私の心の中にとどまるようにしたいと，それだけを望んだだけなのです。それというのもジョヴァンニ，どうか信じてくださいね，私の肉体は毒に養われていても，私の魂は神様のお創りになったものですし，日々のかてとして愛にあこがれているのですから。ところが，父は —— 私たちをこういう恐ろしい絆で結びつけてしまいました。ええ，私を蹴飛ばしてください！踏みにじってください！殺してください！ああ，あなたにあんな言葉を浴びせられては，死んだほうがどれだけましでしょう！」[16]

ジョヴァンニの激情も言葉になって爆発しつくしたかのように，彼の心も幾分静まる。二人は絶対の孤独の中にいるかのようにつっ立っていたが，たとえあたりに人間が群がっていたにしても，二人の孤独には変わりがありそうにはなかった。それならば，人けのない砂漠に隔離されたような自分たちは，お互いに心をよせ合うべきではなかろうか？自分たちが互いに冷酷な態度をとったりしていたのでは，誰が親切にしてくれるものがあろう？それに自分にはまだ，救われたビアトリスの手をとって通常の性質の限界内に帰ってゆける望みがあるかもしれないではないか，とジョヴァンニは思った。そこで彼は教授からもらった薬を取り出し，「これを一緒に飲んで，悪から浄化されようではないか」という。

ビアトリスは，「私が飲んでみます。あなたはその結果がわかるまで待っていてください」といって，バグリオーニの解毒剤を唇へもっていく。その瞬間に，ラパチーニが門からやってきて，美術家が一枚の絵か，ひとつながりの彫像を完成することに生涯を捧げてきて，いまやっと満足の目で自分の成功を眺めるかのような，勝ち誇った態度で，美男の青年と美しい娘の姿を見つめる。

「娘よ，お前はもうこの世を孤独に過さなくてもいいのだ。お前の妹の木のあの貴重な宝石の一つをつんで，お前の花婿の胸につけさせるがいい。もうあれもこの青年をそこなうことはあるまい。私の科学とお前たち二人の間の共感のおよぼした力によって，この青年もありふれた男たちからは孤立しているのだ。私の誇りと勝利の娘であるお前が普通の女たちから孤立しているように。従って，これからはお互いにとっては何よりも愛しいものとして，他のすべてのものたちには恐るべきものとして，共にこの世を過してゆくがいい！」[17]

しかし，ビアトリスは弱々しい声で次のように言い残して息絶える。

「お父さん，なぜあなたは，あなたの子供にこのような惨めな運命をもたらすようなことをなさったのですか？……私は恐れられるよりも，愛されたかったのです。ですが，今ではもうそれもどうでもいいことです。お父さん，私は去ってゆきます。あなたが私の存在に混ぜ合わせようと努力なさった悪も，夢のように消えてしまうところへ――その毒の花のように。その花も，私がエデンの園の花にとり囲まれた後は，私の息を汚すこともありますまい。さようなら，ジョヴァンニ！あなたの憎しみの言葉は私の心の中に鉛のように沈んでいます。でも，その言葉も，私が天へ昇っていくにつれて，離れ落ちることでしょう。もしかすると，あなたの本質には，私の本質にあるよりももっと大きな毒が，最初から潜んでいたのではありませんか？」[18]

ビアトリスにとっては――ラパチーニの手腕が彼女の地上的な存在にあまりにも根本的な変化を及ぼしていたがために――毒が生命であり，従って解毒剤が死であったのだ，と作者は説明を加えている。

そして最後の瞬間に，バグリオーニ教授が窓から顔を出し，恐怖の念をまじえた勝利の声を，雷に打たれたかのようになっているラパチーニに向かって高らかに浴びせる。「ラパチーニ！これが君の実験の結果なのか」と。

III

これまで見てきたように，『ラパチーニの娘』は，その枠組においてゴシック・ロマンスの要素を多分に備えている。例えば，「悪漢役の医科学者ラパチーニが，イタリアの古城にあたる隔離された庭園で，幽閉されたヒロインともいうべきビアトリスの体を毒草により汚染し，そのヒロイン救済に現われたプリンス役の医学生ジョヴァンニをも虜として，毒に感染させるが，最後にヒロインのヒーローに対する純愛によって解決が図られる」というように一定の型にはまっており，また，具体的には，キーツの『レイミア』(*Lamia*) のプロット構成との類似点も多い。即ち，1）家族から離れた若い学生が，超自然的能力をもった魅惑的な美女と出合い，恋に陥いる。2）学生はその美女を理想化するが，その美女に彼女の本質的な女性らしさを認知するよう説得される。3）その恋人たちは法外な（だが不自然な）ほど華麗な隠れ家に住む。4）学生は世間からも身を隔離し，街頭で自分の教師に会っても，避けようとする。5）教師が隠れ家に侵入し，恋人たちの生活に干渉する。6）教師は魅惑的な美女に敵対して彼女を破滅させるが，同時に，自分の学生兼友人をも殺すか破滅させる[19]。

更にまた，この作品にはエデン神話の形態も巧みにとり入れられている。この毒草の庭園において，生命の木にあたるものは泉であり，ビアトリスの精神であり，知恵の木にあたるものは灌木であり，ビアトリスの肉体である。ラパチーニの医科学上の知識と技術という知恵の木から生まれたものは，その人工的な外観がいかに華美であろうとも，その内部には致命的な毒性を宿しているのに反し，神の創造の所産であるところの泉と精神は永遠不滅であり，泉が灌木を養っているように，ビアトリスの精神が肉体を支配し生かしているのである。ここには，自然と人工，精神と肉体，生と死という矛盾対立の二元的要素が含まれていることがわかる。ジョヴァンニとビアトリスが逢引きを重ねる毒草の庭園は，ラパチーニが生涯を賭して人間の二重性，限界に挑んだ成果であり，ジョヴァンニがビアトリスの毒に感染して彼女と共に世間から孤立したのを見て，ラパチーニが，その二重性，限界の打破に成功したかのような錯覚をいだき，「自分の子供たちに祝福を願う父親の態度で二人の上に両手をさしのべた」[20]のは，かつてのエデンの園で，知恵の木の実を味わう以前のアダムとイブに祝福をたれた全能の神のパロディとみなすことができる。

このように，ホーソーンは種々様々な要素を枠組や題材としてこの作品を構成し，神秘的，幻想的な雰囲気をかもし出しながら，人間の罪とその結果の問題を描き出しているのである。[21]

ホーソーンは，多くの作品において，傲慢，孤高，偏狭を神への冒瀆，同胞愛の欠如として非難しているが，この作品においては，ラパチーニ博士がその対象になっていることは明らかである。

『あざ』におけるエイルマー同様，ラパチーニは当代きっての優秀な医科学者であるが，自己の目的追求のためには，人間を実験材料とすることをいとわぬ冷血漢であり，一種の理想主義者である。彼は美貌の娘に，さらに如何なる権力も力も敵対しえないような，ひと息でとりしずめられるほどの強大な力を付与することを望み，自然の摂理に逆き，人間の限界への挑戦を試みるのである。

彼もまた,「創造主の役割の強奪」[22] という知的傲慢の大罪を犯しているのである。結局，ラパチーニは娘の肉体は改造できたが，その精神までは変えることができず，娘に死なれてその実験は失敗に終わるのである。

しかし，この作品でホーソーンの非難の対象となっているのは，人間の限界への挑戦者としてのラパチーニひとりだけではない。ビアトリスの肉体の濃艶さのみに目を奪われ，反面，その毒性への疑惑と恐怖に終始するのみで，彼女の精神の清純さ，神聖さを容認できず，彼女を「通常の性質の限界内」につれもどそうとするジョヴァンニにも，ホーソーンは警告を発している。ついに自分も毒に感染したことを知ってビアトリスに激しい呪いの言葉を吐いたジョヴァンニに対し，ホーソーンは,「ああ，ビアトリスのあのように深い愛が，ジョヴァンニのあのように残忍な言葉で踏みにじられた後でも，なおこの世での結びつきと，この世での幸福が可能であるなどと思うとは，なんと脆弱で利己的で無価値な精神なのだろう！いや，いや，そのような望みはありえないのだ。彼女は傷心の重い足どりで，時の境界線を越えなければならない —— 天国の泉で心のいたみをいやし，不滅の光明の中で悲しみを忘れ，あの世で幸福になるしかないのだ」[23] と述べ，また，ビアトリスにも「さよなら，ジョヴァンニ！もしかするとあなたの本質には，私の本質にあるよりももっと大きな毒が最初からひそんでいたのではありませんか？」と言わせているのである。ビアトリスは自己犠牲によって純愛を貫き天国へと赴くのであるが，体に毒性を帯びたまま現世にとり残されたジョヴァンニこそは，脆弱で利己的で無価値な精神の持ち主なのである。そして彼に解毒剤を与えた打算的で名誉欲の権化であるバリオーニも同類と考えられる。ジョヴァンニは彼の肉体を汚染したビアトリスを「呪われ者」と罵倒したが，ホーソーンにとっては，解毒剤による毒の解消を意図し，合理主義と肉体の上に立つところの現世における結合と現世における幸福を願ったジョヴァンニこそ，現世の絆につながれた「呪われた人々」の典型なのである。医科学上の知識と技術から生まれた解毒剤によって「通常の性質の限界内」につれもどそうとすることは，ビアトリスを知力による傲慢の罪の犠牲者から，知力による怯懦の罪の犠牲者にすることにすぎないのである。[24]

このようにホーソーンは，人間改造をテーマとしたこの作品において，人間の限界を打破せんとして傲慢の罪を犯す理想主義者と，人間の限界内で保身を計って怯懦の罪を犯す現実主義者とを対比させ，真にその限界を超越するものとして自己犠牲という純愛を賛美しているのである。そしてこれは，科学と産業の発展が著しく，理想主義との矛盾をはらんでいた当時の時代風潮を象徴しているようにも思われる。

注

1）Randall Stewart, Nathaniel Hawthorne —— A Biography(Yale University Press, 1961)pp. 4－5

2）ホーソーンは，この作品を外国の作家M. del' Aubépine（フランス語でホーソーンの意）の翻訳ものとして扱っている。

3）Nathaniel Hawthorne, "Rappaccini's Daughter"(The Centenary Edition X, Mosses From An Old Manse, Ohio State University Press, 1974)pp. 91－92

4）Ibid. p. 97

5）Ibid. p. 99

6）Ibid. p. 102

7）Ibid. p. 105

8）Ibid. p. 107

9）Ibid. p. 114

10）Ibid. p. 116

11）Ibid. p. 118

12）Ibid. p. 121

13）Ibid. p. 122

14）Ibid. p. 123

15）Ibid. p. 124－5

16）Ibid. p. 125

17),18）Ibid. p. 127

19）Norman A Anderson, "'Rappaccini's Daughter' : A Keatsian Analogue ?"(PMLA May 1968)p. 281

20）Nathaniel Hawthorne, op. cit, p. 126

21）Richard H. Fogle, Hawthorne's Fiction : The Light and The Dark(University of Oklahoma Press, Norman 1964)p. 101

21）Randall Stewart, American Literature and Christian Doctrine（刈田元司訳　北星堂　昭和33年）p. 103

23）Nathaniel Hawthorne, op. cit, p. 126

24）元田脩一,「アメリカ短篇小説の研究」（南雲堂 1972年）pp. 70－98

（昭和58年11月2日受理）